慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	自然の現象学と基づけの概念
Sub Title	Die Phanomenologie der Natur und der Begriff der Fundierung
Author	吉川, 孝(Yoshikawa, Takashi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2003
Jtitle	哲學 No.109 (2003. 3) ,p.47- 70
JaLC DOI	
Abstract	E. Husserl hat in seiner regionalen Ontologie die sich verflechtenden und durchdringenden Realitaten Natur und Geist abzugrenzen versucht. Diese in Ideen II entwickelte Ontologie erforscht das Wesen von den sachhaltigen Gegenstanden, urn die empirischen Wissenschaften durch die Wesensgesetze zu rationalisieren und begrunden. Es ist hier bemerkenswert, dass die Phanomenologie ins Gebiet der Natur geleitet wird und sich als eine Art von Naturphilosophie bildet, obwohl sie sich noch immer als die Wissenschaft von dem reinen Bewusstsein bezeichnet und den Naturalismus, der das Bewusstsein naturalisieren oder realisieren will und damit fur seine Eigenart blind ist, radikal kritisiert. In der phanomenologischen Ontologie der Natur, wird sogar ihre Analyse methodisch in der naturalistischen Einstellung vollzogt. Von diesem Standpunkt aus, wird die ganze Welt als Natur gefasst. Und es zeigt sich, dass die materielle Natur im ersten Sinn die animalische Natur im zweiten Sinn (die das Geistige in sich schliesst) fundiert. Diese Fundierung des Geistes durch die Natur werden das Prinzip kann, aufgrund dessen die phanomenologishe Analyse die ursprungliche Natur fur sich herausstellt und sie von dem Geist unterscheidet. Die naturale Reduktion als der Ruckgang auf die Naturdinge schaltet die geistige Auffassung aus, und zwar in der Weise, ein Fundiertes auszuscheiden. Husserl als tranzendentaler Phanomenologe schliesst letztlich Ideen II mit folgenden Behauptung: Der Geist als das was der Natur Sinn gibt absolut sei. Aber er spricht andererseits von den Abhangigkeiten des Geistes von der Natur. Die Phanomenologie lehnt also den Begriff von der Fundierung nicht ab, sie will vielmehr dadurch die universale Welterkentnis vollfiihren, Natur und Geist von beider Seiten aus zu verstehen.
Notes	投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000109-0047

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

投稿論文

自然の現象学と基づけの概念

吉　川　　孝*

Die Phänomenologie der Natur und der Begriff der Fundierung

Takashi, Yoshikawa

E. Husserl hat in seiner regionalen Ontologie die sich verflechtenden und durchdringenden Realitäten Natur und Geist abzugrenzen versucht. Diese in *Ideen II* entwickelte Ontologie erforscht das Wesen von den sachhaltigen Gegenständen, um die empirischen Wissenschaften durch die Wesensgesetze zu rationalisieren und begründen.

Es ist hier bemerkenswert, daß die Phänomenologie ins Gebiet der Natur geleitet wird und sich als eine Art von Naturphilosophie bildet, obwohl sie sich noch immer als die Wissenschaft von dem reinen Bewußtsein bezeichnet und den Naturalismus, der das Bewußtsein naturalisieren oder realisieren will und damit für seine Eigenart blind ist, radikal kritisiert. In der phänomenologischen Ontologie der Natur, wird sogar ihre Analyse methodisch in der naturalistischen Einstellung vollzogt. Von diesem Standpunkt aus, wird die ganze Welt als Natur gefaßt. Und es zeigt sich, daß die materielle Natur im ersten Sinn die animalische Natur im zweiten Sinn (die das Geistige in sich schließt) fundiert.

Diese Fundierung des Geistes durch die Natur werden das Prinzip kann, aufgrund dessen die phänomenologishe Analyse die ursprüngliche Natur für sich herausstellt und sie von dem Geist

* 慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程（哲学）

unterscheidet. Die naturale Reduktion als der Rückgang auf die Naturdinge schaltet die geistige Auffassung aus, und zwar in der Weise, ein Fundiertes auszuscheiden. Husserl als transzendentaler Phänomenologe schließt letztlich *Ideen II* mit folgenden Behauptung: Der Geist als das was der Natur Sinn gibt absolut sei. Aber er spricht andererseits von den Abhängigkeiten des Geistes von der Natur. Die Phänomenologie lehnt also den Begriff von der Fundierung nicht ab, sie will vielmehr dadurch die universale Welterkentnis vollführen, Natur und Geist von beider Seiten aus zu verstehen.

序

E. フッサールは，諸学問の基礎づけという哲学的課題を掲げ，学問の対象領域の本質を解明ようとした．事物・身体・心などの領域の実質的本質を解明する哲学的学科は，「領域的存在論 (regionale Ontologie)」と呼ばれている．領域的存在論は，自然主義的風潮のなかで巻き起こった，精神科学の方法論争に参与しようと意図されたものであり，1913年に公刊された主著『純粋現象学および現象学的哲学のための諸構想　第1巻』(以下『イデーンI』) の続編において展開される予定であった[1]．そこでは，第1巻において未解決にされていた「精神科学は自然科学と並列されうるのか，それとも対立させられるべきなのか，また，精神科学それ自身は自然科学と見なされねばならないのか，それとも一つの本質的に新しい型の学問と見なされねばならないのか」(Hua. III/1, S. 11) という問題に対して，最終的な答えが与えられるはずであった．こうした企図は，「精神科学にその固有の権利を保証し，方法的に独立した学問としてのそうした学問の性格を保証するという，同時代の諸々の努力」[2] の系譜に位置づけられるものである．フッサール自身も，ディルタイ，ヴィンデルバント，リッケルト，ジンメル，ミュンスターベルクなどの名を挙げながら，研究の意図の親近性を隠そうとはしていない (Vgl. Hua. IV, S. 173).

しかし，自然主義に抗して精神科学を擁護するというこの当初の意図の成否を別にしても，領域的存在論は，世界のさまざまな存在領域を現象学的に解明する哲学的世界理解の試みという意義をもっている．この存在論が成し遂げる「普遍的でアプリオリな世界認識」(Hua. XXVII, S. 166) は，古代ギリシアより哲学の指導的理念とされた，存在者の全体性についての学（存在論）への現象学的なアプローチでもあった．ここで改めて注目されるべきことは，意識の哲学である現象学がその反自然主義的な志向にもかかわらず，自然の領域へと積極的に足を踏み入れ，ある種の自然哲学を形成したことであろう．本稿では，『イデーン II』で展開される領域的存在論が自然の構成分析を中心に追跡され，自然の現象学を導く原理的な根拠が「基づけ (Fundierung)」という発想にあることが示されるだろう．

1. 自然の現象学の方法上の前提

『イデーン II』の複雑な分析を理解するためには，方法上の前提を二つの側面から明示することが有効である．

まずは，領域的存在論が現象学の構成的問題の一環として実行されることに注意が向けられねばならない．領域的存在論は，現象学の体系内においては「志向性の問題」に組み入れられ，「理性の現象学」(Hua. III/1, S. 337) の課題となる．『イデーン I』の（「領域的存在論の理性論的問題．現象学的構成の問題」と題されている）第149節において言われているように「いかなる対象的領域も，意識に即して構成される」(ebd., S. 344) のであるから，領域的本質を把握するという課題も，意識と対象の相関性，志向的相関性のうちで行われなければならない．したがって，事物の本質の画定も「超越論的意識における事物という領域の対象性の一般的『構成』という問題，あるいはより手短に表現されれば，『事物一般の現象学的構成』という問題」(ebd.) として行われる．このように，領域の分析が意識と対象との志向的関係を顧慮してなされるかぎりにおいて，それは

「現象学的構成」と呼ばれる問題系に属している．『イデーンII』の分析そのものが「構成的現象学」(Hua. I, S. 168) の圏内にあるということになるだろう．

志向性というのは，意識がつねに「或るものについての意識」として対象への関係性をもち，意識作用が対象を意味としてみずからのうちに含んでいることを特徴づける概念である．つまり，「志向的体験の本質を成しているのは，『意味』のようなものを，ときには多様な意味をみずからのうちに携えているということである……」(Hua. III/1, S. 202)．或るものを意味として現象させ，それをみずからのうちに含みもつ作用の働きが意味付与 (Sinngebung) であり，それは統覚 (Apperzeption) や統握 (Auffassung) とも呼ばれる．したがって，領域的存在者の構成分析は，意味付与する作用の側面（ノエシス）との相関関係において存在者の意味（ノエマ）を解明しようとする．こうして，志向的分析においては，事物や身体や心の意味が，事物統覚や身体統覚や心統覚との相関性において分析される．志向的分析は意味分析であり，そこでは，ノエマ的意味に焦点を当てる「ノエマ的反省」(ebd., S. 349) によって対象の意味が明らかにされる．こうした方法は，意味や意識をその主題の中心に据えるために，多分に観念論的色彩を帯びていると言えるだろう[3]．この見地から言えば，すべては意識にとっての意味であり，事物の分析も，事物意識にとっての事物意味の分析となる．これが『イデーンII』の方法の一つの側面である．

しかしながら，この志向的分析が『イデーンII』においては極めて特異な意味をもつことになる．というのも，この著作においては，自然科学の根本概念としての自然を主題化するために，意図的に実在論的な立場が採用されるからである．フッサールは，『イデーンII』の第3篇においてそれまでの分析（第1篇と第2篇）を振り返りながら[4]，「それらの篇においては，諸々の研究は自然主義的態度へと結びつけられていた．自然主義的態度のうちにおいて，われわれはみずからの分析を遂行した」(Hua.

IV, S. 174) と述べている．自然主義的態度に立つということは，世界全体を自然と見なすということである．そのとき，自然科学者が世界を探求する場合と同様に，世界とそのなかに存在するものの一切が自然の実在性のなかに存在するものと考えられ，事物のみならず人間の身体や心までもが，自然の実在的連関における項と見なされる．こうして，世界内のすべての対象が自然のなかに組み入れられることになる(5)．フッサールは，こうした態度において自然を純粋に主題化し，その本質を解明しようとした．ここにはさらに，自然主義的態度における学問が存在者の普遍性を視野に収めることができるのか，自然科学とは別の方法を採用する学問（精神科学）が必要ではないかということを検討する意図も含まれている．つまり，フッサールは自然主義的態度において身体や心の分析を行い，そこから抜け落ちてしまうものがないかどうかを確認するという目論みを抱いていた．

自然の現象学を導くこうした前提は，“方法的自然主義”とも名づけられるだろう．それは自然を純粋に取り出すための方法的操作であると同時に，自然主義の限界を探る思考実験という意味をもっている．もっとも，方法的自然主義の内部においても，現象学は対象と作用との志向的関係を考慮することを忘れはしないだろう．そのため，自然は，自然主義的態度の主観との相関性において，自然主義的態度をとる主観にとっての相関項として探求される．このように，志向的分析と方法的自然主義という一見すると相反する前提が，『イデーンII』の自然の現象学を支える方法となっているのである．

2. 自然と精神の絡み合い

こうした前提を踏まえたうえでも，領域的存在論への取り組みを前にしてなおも困難がつきまとう．それというのも，諸々の領域は互いに絡み合い，密接に重なり合い，浸透し合っているからである．「異なった諸領域

の絡み合い (Verflochtenheit) には，きわめて困難な問題がまとわりついている」(Hua. III/1, S. 354) と言われるように，諸事象の絡み合いは一つの領域を純粋に取り出すことを妨げる．われわれが身のまわりで接するさまざまなものを思い浮かべてみれば，ここで念頭に置かれていることが明らかになるであろう．目の前にある椅子を例にするならば，それは差し当たり自然事物ではなく，座るための「使用客観」(Hua. IV, S. 27) であり，座り心地が良かったり悪かったりする「価値客観」(ebd.) でもある．しかし，その机は大きさや形をもった物体であり，ときには物理学や化学の実験の対象となり，その限りでそれは自然事物でもある．結局，そうしたすべての要素の絡み合いのうちで，われわれは机に接している．

「自然のものと精神のものとは，われわれにとって明晰に分離されて登場するわけではない．そのため，こちらに自然が存在して，それとは完全に異なったものとして，そちらに精神が存在すると単純に指摘するだけで十分であるというわけにはいかないのである．むしろ，差し当たりは明らかに異なっているように見えるものは，より詳しい考察のもとに置かれると，不明晰に絡み合わされており，理解するのが極めて困難な仕方で互いに浸透し合っていることが明らかになる」(Hua. IX, S. 54).

このように，自然と精神は平面上に区画整理されうるようなものではない．フッサールが 1919 年の「自然と精神」に関する講義において用いた比喩によれば，「海と陸が地球の表面を区分しているように」(Ms. FI35/18a)[(6)] は，自然と精神は存在者の領分を分かち合ってはいない．自然科学の対象である自然や精神科学の対象である精神は，日常的な具体的対象の一側面のみを際立たせ，分離したものにほかならない．それゆえ，学問の対象領域の画定という学問論的課題を果たすためには，自然と精神の両者を何らかの形で区分しなければならず，絡み合い，浸透し合うものを，引き剥がし，分離するための方法や原理が求められる．具体

的日常性においてわれわれが接するものが，学問の対象としての自然や精神とは異なったものであるため，自然と精神の学問論的研究は，日常の具体性を人為的な操作によって解きほぐすという形をとらざるを得ないのである．

この操作は後年のフッサールによって「抽象」と呼ばれている．近代自然科学（ならびにその基礎論であろうとする自然の存在論）のような自然についての学問は，具体的世界から自然だけを「抽象」(VI, S. 230) することで自立的な学問を作り上げた．これに対応して，精神の存在論（現象学的心理学）は，逆に精神を精神として純粋に取り出すために「補完的抽象」(ebd., S. 231) と呼ばれる操作を実行する．第一の抽象においては事物や自然が純化され，第二の補完的抽象においては，その「反対面」(ebd.) として心や精神が純化される．自然と精神の存在論を抽象と補完的抽象とによって形成するときにはじめて，事物と精神とが区分され，際立たせられる可能性が手に入るのである．こうした二つの抽象という考え方は，先に述べられた『イデーン II』の二つの方法上の前提と無関係ではない．自然の抽象は，言うまでもなく方法的自然主義の操作と重なり合う．そこでは心的なものを含むすべての出来事が物質的自然に組み入れられ，事物化され，そうした意味において実在化される．さらにはその一方で，補完的抽象も志向的分析のもつ観念論的傾向と密接に結びついている．というのも，補完的抽象によって取り出される純粋に精神的なものというのが志向性を意味しているからである．現象学的心理学は，事物の実在性から純化された志向性を純粋に摘出することで，志向的分析の素地を形成する(7)．

こうしたことを踏まえたうえで領域存在論の展開の見通しを述べるならば，一方では自然の存在論（自然の現象学）が自然の本質を探求し，実在論的傾向を打ち出すことになり，他方では精神の存在論（精神の現象学，現象学的心理学）が精神の本質を，つまり志向性を純粋に取り出すこと

で，志向的分析が最終的に依拠する観念論的な基盤を用意する．『イデーンII』においては，自然の解明と精神の解明とが互いに相手をみずからの方へと引き寄せ，取り込もうとしながら，分析の歩みは複雑な運動を繰り広げる[8]．フッサールがこうした二つの傾向の狭間にあっていかなる哲学を形成するのかということが，これから分析を実際に追跡する際の興味深い観点となるだろう．

3. 基づけの概念

こうした自然と精神の絡み合いを解きほぐし，抽象によって自然の領域を主題化するためには，また，複雑に絡み合う事象のなかで一部の契機を精神的なものとして，また別の契機を自然のものとして区分けするためには，ある種の原理への依拠が不可欠である．実際のところ，フッサールは『論理学研究』（以下『論研』）以来の現象学の基本概念を手掛かりにして，自然と精神に境界線を引くことを試みる．この手掛かりが「基づけ」と呼ばれる概念であり，それは『論研』の第3研究において詳細に論述されている[9]．そこでは，直接的・間接的，相互的・一方的などの観点から，基づけの概念が分類されているが，自然の現象学を展開するに当たって差し当たり重要なのは，「一方的基づけ (einseitige Fundierung)」と呼ばれるものである．

一方的基づけの概念を敷衍すると，「AがBを基づけている」ということは「Aなくしては Bが存在できない」「AがBの基盤となって，Aの上にBが成立する」ということになる．基づけるものAは基づけられるものBなくしても自立的に存在することができるが，BはAに依存しており，その意味で非自立的である．しかし，BはAに解消されてしまうことのない新たな層を形成する．フッサールの志向的分析においては，この基づけの概念は作用（とその相関項）の段階系列として展開されている．「ある具体的体験の統一のなかにおいて，幾重にも諸々のノエシスが

相互に積み重ねられており，それゆえノエマ的相関項も同様に基づけられたものとなっている」(Hua. III/1, S. 215) と言われるように，意識は基づけの秩序によって階層化されている．『イデーンII』の分析に関わる基づけ関係としては，次の三種のものが挙げられる．

第一に，「感覚的（感性的）綜合」と「カテゴリー的綜合」(Hua. IV, S. 18) とのあいだに基づけ関係が成立している．これは，『論研』においてもすでに詳細に分析されており，感性的対象が知覚において直接的に与えられ，「と」や「である」のようなカテゴリーを用いて形成される事態を把握する高次の作用に対する基礎として機能するとされていた(10)．

第二に，知覚と「価値覚 [Wertnehmung]」(Hua. IV, S. 22) とのあいだにも同様の関係が成り立っている．評価によって生じる価値は，知覚表象に基づけられ，上層として築き上げられた新しい層である．価値客観というのは，知覚対象に価値が基づけられつつ新たな統一を形成しているような対象である．

第三に，事物，身体，心，社会的共同体（ないしはそれらの統握）の関係においても，この基づけ関係が成り立っている．「『物質的事物』と『心』とは異なった存在領域であるが，やはり後者は前者のうちに基づけられている」(Hua. III/1, S. 38)．また，これらの層のうえに，共同体という新しい層が構成され，社会的共同体や文化形成体などが成立する．

> 「このような共同体は，本質的には，心理的実在のうちに基づけられており，またこの心理的実在は物理的実在のうちに基づけられているのであるけれども，その共同体はより高次の新しい様式の対象性であることが示される」(Hua. III/1, S. 354).

われわれの文脈で理解された基づけ関係（感性的なもの→カテゴリー的なもの，事柄→価値，事物→身体→心→共同体）において注目すべきことは，基づけるものは基づけられるものよりも，精神ないしその活動の所産を含むことが少なく，自然に近いということである．例えば，知覚対象と

価値対象の例を考えてみればわかるように，知覚されるものは，精神の活動による所産を含むことなく，あるいは，より少ない精神的活動において形成されている．知覚対象の形や色は，いわば自然の側に存在するものとして受動的に与えられるのに対して，その対象の美しさや有用性などは，精神の活動の所産，精神の方から能動的に与えたものと言える．つまり，基づけられていること，基づけの段階において高次のものであることは，精神的なものをより多く含んでいるということを意味する．知覚対象とカテゴリー的対象の関係も同様である．知覚対象が与えられるということは，カテゴリー的に判断がなされる場合と比較して精神の関与が少なく，より自然に近いものとして与えられる．社会の共同性や文化的制度が精神的なものであることは言うまでもない．このように，基づけ関係においては，自然が精神を基づけているという関係が成立していると考えることができる．

したがって，この基づけ関係は，自然を純粋に自然として取り出すための手掛かりとなる．つまり，基づけられるものから基づけるものへと，非自立的なものから自立的なものへと移行し，積み重ねられた層を一枚ずつ剥がすことが，精神を排除して自然を取り出すことになるのである．

4. 自然への還元

このような基づけるものへの視線の変更は，フッサールがたびたび現象学の出発点において実行する操作であり，『事物と空間』講義や『経験と判断』の緒論においてもそうした運動が行われている[11]．この運動は，「還元」(Hua. IV, S .25) や「エポケー」(ebd., S. 27) とも呼ばれており，より正確には「自然に即した還元 (naturale Reduktion)」(Hua.XIV, S. 444) と特徴づけられるべきものであろう．この還元は，価値判断や学問的判断によって築かれた文化的社会的形成体の層から前学問的な感性的知覚や感覚の層への帰還を行う．これによって最終的には，原初的な自然が

現象する場面が開示される．

こうした還元は，『イデーンII』においては具体的にどのように行われているのだろうか．フッサールはまず，自然科学者の意識へと目を向け，自然科学的態度の在り方から自然を規定しようとする．その際には「……われわれが快適さ，美しさ，便利さ，実践的な適切性，実践的な完全性という表題のもとに事物に帰するようなあらゆる述語（価値，財，目的客観，道具，何かにとって好ましいなど）は，まったく考察の外に置かれている．……それらの述語は，そうした意味における自然には属していない」(Hua. IV, S. 2) と言われる．だが，価値的なものを捨象しても「単なる事柄 (bloße Sache)」(ebd., S. 16) としての自然は残りつづけている．このような非自立的な価値と自立的な事柄との基づけ関係は，「評価する態度（最も広い意味で美や善を評価する態度）や実践的態度」に対する「ドクサ的 - 理論的態度」(ebd., S. 2)，つまり自然科学者の主題的態度の優位性を意味している．このように，自然は，評価する主観や実践的主観に対してではなく「理論的主観に対して現に存在し，その相関領分に属している」(ebd., S. 3) のである

さらには，この理論的態度そのものの在り方がより深く考察されて行く．というのも，「理論的態度やその理論的作用（それを実行することで主観は理論的主観になる）の固有様式に属していることだが，それらのなかにおいては，対象がある意味で先立って存在しており，そして，その先立っている対象がはじめて理論的対象になる」のであり，「前理論的にすでに対象が構成されている」(ebd., S. 6) からである．つまり，理論的態度（自然科学）というのは，先所与性 (Vorgegebenheit) としての対象（自然）を理論的に規定するために，端的な経験からの「態度変更」(ebd., S. 11) によって生じたものにすぎない．したがって，「われわれはどんな場合でも，理論的作用から生じているのではないような先所与的対象性へと，それゆえ，いかなる論理的カテゴリー的形成をもみずからに知らせる

ことのない志向的体験において構成されているような先所与的対象性へと到る」(ebd., S. 7) ことができる．このような「ある種のあらかじめ与えられた対象——理論的，評価的，実践的な何らかの自発性によってもともとは生じていた対象——をもはや遡及的に指示することのないような対象」，つまり「基づける対象性ないしノエマ」は，「原対象」(ebd., S. 17) とも呼ばれている．このようにして基づけの階層性の根源に見いだされる原対象が，「感覚対象 (Sinnengegenstand)」ないしは「感覚事物 (Sinnending)」(ebd.) にほかならない．

フッサール自身は『イデーン II』の本文ではっきり述べていないものの，感覚対象という基づけの基底への遡行はさらに二つの注目すべき側面をもっている．まず，ここでは社会性や間主観性を問題にするような規定がすべて取り払われていることが重要である．精神的意義や道具としての価値をもたない事物は，人間の文化的社会的活動から生じたものをも含まず，感覚事物は単独の身体的主観の相関項（「個人的主観的な事柄」(Hua. IV, S. 305) であるにすぎない．したがって，理論的ないし実践的な間主観性の活動の一切がここでは度外視されている．さらには，感覚する主観すらも考察の出発点には引き入れられていないことが指摘されねばならない．事物の現象学的分析においては，通常，知覚される客観と知覚する主観の双方が解明されるが，ここでは，「自我へのこうした体験関係」や「自我身体への客観の知覚関係」(Hua. XVI, S. 10) が考察の外に置かれている．事物の現象学的解明の出発点においては，「差し当たり，われわれはこうした自我-関係をできるかぎり捨象したい」(ebd.) とさえ言われるのである．このように，自然事物の所与性は，差し当たり主観との関係までもが捨象されて，その分析が開始される．フッサールはこのようにして基づけの最下層へと遡及し，「下から」(ebd., S. 7)「自然から」(Hua. IV, S. 1), すなわち感覚事物から出発する．この出発点は，フッサール現象学のなかで実在論的傾向が最も顕著になる場面とも言えるだろう．

5. 事物の所与性

このような方法的操作によって摘出された感覚事物の解明がなされなければならない．精神的活動の層が可能な限り排除された自然，自然科学者の自然ですらないような自然とはどのようなものであろうか．ここでは，カテゴリー的規定の排除とともに，事物は他の事物との関係づけを失っており，因果的規定性が見いだされない．しかも，自然科学的な精密な因果性のみならず，「『知覚された』因果性」(Hua. IV, S. 43) までもが考察の外に置かれる．フッサールは立体鏡に写しだされるピラミッドの例を挙げる (Vgl. ebd., S. 36) が，その意図は，脈絡をなくした単独の事物（例えば，無にも等しい暗黒の背景に浮かびあがるコップ）の特異な身分を指摘することにある．どこから光によって照らし出されているのか分らないがともかく暗い背景から浮かび上がって見える事物のようなものとは，どのようなものなのだろうか．このような事物の身分の特徴を，フッサールは次のように語っている．

> 「われわれが（事物連関の外部にある事物を取りあげているという）先の前提のもとで経験を遂行するとき，経験された物質的事物が現実的に存在するかどうか，われわれが欺きのもとに置かれているかどうか，経験されたものが単なるファントムかどうかを証示しつつ決定するためのいかなる可能性をも，われわれは見いだすことができない」(Hua. IV, S. 40).

つまり，こうした感覚事物というのは，現実性を形成する因果的連関に帰属されないため，現実に存在するかどうかが決定されえない．この事物の中立的な身分がここで「ファントム (Phantom)」と呼ばれているものである．このように，事物から因果的規定性が捨象され，現実性という身分が失われたとしても，あるいは「あらゆる物理学や化学をあざ笑うような」(Hua. V, S.30) 因果的に不可解な出来事が生じたとしても，事物は事

物であることをやめるわけではない．その場合には，客観的因果的規定としての「物質的規定性のあらゆるグループが欠けている」(Hua. IV, S. 36) にすぎないのである．ここでは，「経験措定が要求するものの遮断によって，われわれは，物理学や化学がわれわれに課すことのできるであろうようなあらゆる拘束から自由である」(Hua. V, S. 29)．つまり，ここでは，措定や統握という精神の営みの遮断によって，文字通りの現象学的還元が行われている．このとき，「ファントムは物質性の諸成素なしに原本的に与えられて」いるが，反対に「物質的事物はみずからを『示す』ことがなく，本来的にはわれわれの視野に現れることなく，原本的所与性に至ることがない」(Hua. IV, S. 37)．このように，非自立的な物質性の「一方的な解消」のもとでなおも見いだされるファントムこそが「『本来的に』与えられたもの」(ebd.) であり，事物の現象，事物の所与性，事物の意味，しかも「あらゆる措定から自由な意味」(Hua. V, S. 28) ということになるのである．このような「物理学なき世界」(ebd., S. 30), つまり「ファントムのカオス」(ebd., S. 32) にも，特定の秩序（現出することの，与えられることの秩序とも言うべきもの）が存在する．それが，「単なるファントム世界に対してなおも，純粋時間論と純粋幾何学が妥当する」(ebd., S. 30) という表現からも推察されるように，事物のもつ空間性や時間性である．さらには，「ファントム延長の感性的充実に関しても，諸々の規則が存立している」(ebd., S. 30f.) ということから，因果的性質ではない感性的な性質をめぐる規則もここに含まれている．

こうしたことを踏まえて，フッサールはファントムのことを「感性的図式」とも呼ぶ．感性的図式とは「みずからの上に延長する充実をともなった物体的（空間的）な形態」(Hua.IV, S. 37), つまり「単に『感性的』性質でもって充たされた空間形態」(Hua. III/1, S. 350) であり，例えば，赤という色彩性質で充たされた三角形の物体などのことである．われわれはファントムに対しても「その形態，その色，その滑らかさや粗さ，それ

らと類似する秩序の規定に関して有意味な問いを立てることができる」(Hua. IV, S. 36). このように，ファントムは空間的に広がりつつ，その広がりが感性的性質によって充たされている．さらには，「あらゆる事物的存在は時間的に延長し，それぞれがその持続をもっている」のであり，しかも「時間的規定（事物の持続）」にはそれを充たす「実在的徴表」(ebd., S. 28) が対応している．このように，「感性的充実をともなった時間的-空間的図式」(Hua. XVI, S. 343) が事物ファントムである．このような場面においてフッサールが見て取っているのは，事物が事物である限り空間時間的に延び広がり，その広がり（延長や持続）が感性的性質によって充たされているということであり，さらには，そのことが事物が現象することの「根本枠組み」(Hua. IV, S. 37) になっているということである．「延長スルモノ (res extensa)」としてのファントムと，因果的規定をもつ事物としての「物質的ナルモノ (res materialis)」との関係は，『イデーンI』の第149節で次のように適確に表現されていた．

「単なる延長スルモノという統一は，物質的ナルモノという理念による統一なくしても考えられうる．だが，その反対に，延長スルモノではないような物質的ナルモノは考えることができない」(Hua. III/1, S. 350).

事物の本質としてのファントムへのこうした言及は，いまや事物が現象することの規定として理解されるべきであろう．

6. 客観的事物の構成

このように，ファントム（図式）であることが事物の意味にほかならないが，これだけではまだ客観的に存在する事物の構成は解明されていない．真に存在する客観的実在的な事物の構成を理解するには，ファントムという事物所与性の層が超えられなければならない．

「われわれは事物をその単独性において取りあげていた．しかし，事

物が事物であるためには，『周囲状況』との関係が必要である」(Hua. IV, S. 41).

ファントムの単独性という規定から翻って理解されるように，事物の実在性は周囲状況との関連性のうちに見いだされる．つまり，「物質性と呼ばれている本来的実在性は，単なる感性的図式のうちにあるのではなく」，「[周囲状況への] そのような関係やそれに対応した統握様式のうちにある」(Hua. IV, S. 41) と言えよう．ここで考えられていることは，例えば，事物が何らかの照明のもとで現われる場合であり，照明が変化すれば図式としての事物も変化する．つまり，「ここでは明らかに，関数的連関が存立しており，この連関が一方の側での図式的変様を他方の側の図式的変様へと関係づける」(ebd.) のである．このとき，変化が一定していない場合，ないしはその周囲状況が特定できない場合，それは図式の段階において生じる仮象変化という身分を脱しきれない．しかし，絶えず変化し，見せかけにすぎないように思われる事物も，照明の強さとの関連性が因果的に捉えられたとき，同じ照明のもとで同じ変化が生じていることがわかる．「同じ周囲状況のもとで，同じ結果が生じる」(ebd., S. 42) ということは，関数的な依存関係そのものの同一性を意味している(12)．したがって，「実在性，ここでは同じことだが実体性と，因果性とは不可分に共属している」(ebd., S. 45) ことになり，こうした因果的規定とともに，事物は単なるファントムを超えた真なる存在，つまり物質的事物となることができるのである．しかも，こうした「実在化」は「感覚事物が実在的事物の状態性になるという仕方において」(ebd., S. 65) 成し遂げられ，それによって，これまで不確定だったファントムの規定性（色彩や形態など）が現実的な客観性という身分をもつことになる．

このように，「図式の多様性のうちで呈示される依存性の連関における因果的必然性の統一」(Hua. IV, S. 127) が，事物の客観的実在性にほかならない．ここで注目されるべきは，「構成する多様性の項がさらなる多

様性の統一として構成されている」(Hua. XXV, S. 92) ということであり，図式もすでに「さまざまな感官の『感性的現出』の多重性の綜合的統一」(Hua. IV, S. 39) や「射映の多様性における統一」(ebd., S. 127) であった．したがって，ファントムから物質的事物まで，自然事物は，変化の多様性を通じて呈示 (Darstellung) ないし告知 (Bekundung) される同一性である．もっとも，直観的経験が完全に厳密な因果性に，一義的に規定される絶対的な同一性に到達することはなく，自然科学がはじめて「因果性の絶対的に規定された一義的依存性における厳密な同一性という理念」(ebd., S. 49) を掲げた．しかし，事物がどのような段階においてであれ，「告知の統一」(ebd., S. 127) という「形式的一般性」(ebd., S. 126) をもっていることに変わりはない．

7. 身体との関係における事物

このように，事物は，実在的周囲状況との関連においてはじめて，現実に存在する事物としての完全な所与性へともたらされた．しかしながら，これまでの分析はまだ不十分であり，志向的分析の原理によれば，対象は主観との相関関係において解明されねばならないのである．これまでのところ，「この主観はいわば自己忘却のうちにあり，分析する者によっても忘れられたままである」が，現象学的存在論の普遍性への要求を満たすためには，「この自己忘却に手がつけられねばならないだろう」(Hua. IV, S. 55).

このようにして，感覚事物から感覚する主観へと考察は移行することになる．自然の現象学の出発点では，精神的なものが排除されることで，根源的な自然が取り出されていた．それは，主観的な精神的要素をいささかも含んでいない「最も根源的な第一の意味での自然」(Hua. IV, S. 27) としての事物であった．これに対して，ここで主題化されようとする生命は，「第二の広い意味での自然」(ebd.) とも呼ばれ，第一の自然の層に基

づけられて，新しい第二の領域を形成している．これまでのところ，こうした基づけられたものとしての身体や心の層は分析から排除されていたのである．

しかしながら，太陽光線などの事物の周囲状況が事物の「『正常な条件』」(Hua. IV, S. 59) であると同様に，「心理物理的条件性 (psycophysische Konditionalitat)」(ebd., S. 65) も実在的事物の構成に不可欠な契機である．つまり，「身体はあらゆる知覚の手段であり，知覚器官であり，あらゆる知覚のもとに必然的に居合わせている」(ebd., S. 56) ことから，例えば，手の火傷によって事物の現出が変化するように，感覚する身体は「徴表感覚」(ebd., S. 57) という感覚内容の与えられ方を条件づけている．さらにはこれとは別に，「キネステーゼ的感覚」と呼ばれる「自由に動く感覚器官としての……身体が，あらゆる知覚と知覚による証示（経験）にともに関与している」(ebd., S. 56) のであり，例えば，頭や眼球を動かすことで徴表感覚が変化するということを，われわれは知っている．このように，事物が身体に相対的であることから，多様な変化のなかでの同一性という事物の規定も，身体主観との関係で理解されねばならない．こうしたとき，「『真なる事物』というのは，多数の主観の現出多様性のうちで同一的に保持される客観であり，……あるいはまた，こうした相対性が度外視された論理学的 - 数学的に規定される物理学的事物である」(ebd., S. 82) ことになろう．

したがって，客観的事物の構成を解明するためには，複数の主観性という間主観性の分析や，「自発的で『自由な』思考や研究のうちで活動している学問的主観」(Hua. IV, S. 89) の分析が必要である．感覚する身体，キネステーゼ的身体，複数の主観（共同体），理性的主観というものを明らかにするために，今度は主観性そのものの内実へと目が向けられなければならない．

「実際に一般的に，経験される自然と経験する身体とのあいだの依存

性の証示が示したように，物理的自然の意味や構造を完全に明晰化するためには，主観性の研究が無条件に要求されるのである」(Hua. IV, S. 90)

8. 自然としての主観から精神としての主観へ

こうして主観性が主題になるが，方法的自然主義の立場においては，差し当たって主観は「『人間』という自然客観（生命的存在)」(Hua. IV,, S. 161) として考察される．単なる物質的事物より以上のものである人間は，「感覚態 (Empfindnis)」という「身体に特有の出来事」(ebd., S. 146) の層をもっている．例えば，われわれが身体のある部位に痛みを感じる場合，言わば痛みという感覚が内的に感覚されるという事態が生じている．こうした身体的な自己意識とも言うべきものが感覚態であり[13]，これは身体の自然面とも言うことができる．この意味で，生命というのは，物質的事物の層に感覚態という新たな層が付加されることで形成される第二の自然である．

しかし，人間の身体は単に感覚するのみならず，自我が自由に動かすことのできる「意志器官」(Hua. IV, S. 151) でもある．事物の構成にも関与する身体のこの側面は，「わたしはできる」という自我の「能力」(ebd., S. 152) でもあり，自我的なものが身体に不可欠の契機となっている．さらには，人間が人間として把握されるとき，「人間と人間とのあいだのコミュニケーションの可能性」(ebd., S. 162) を排除することができないので，人間の身体は独我論的にのみならず，間主観的にも考察されねばならない．他の生命という統一は，「付帯現前 (Appärsenz) の内部性をともなった根源現前 (Urpräsenz) の身体物体」(ebd. S. 163) という意味をもっている．こうした他の人間を「わたし自身へと転用する」(ebd., S. 167) ことではじめて，自分固有の主観は人間（他者との関わりに生きる存在）という意味をもつことができる．これまで考察されてきた自然事物

はあらゆる主観に根源現前しうる世界であったが，ここでは，他者の内面性という付帯現前の領域（一人の主観にのみ根源現前する領域）が考察に引き入れられている[14]．しかし，「根源的自然による基づけという観点のもとでは」，他者への関わりから形成される「共同体」などの新しい対象を解明することはできない (Vgl. Hua. V, S. 20).

ここで述べられた人間の構成分析は，本来は自然主義的態度において扱うことのできないもの（意志器官や共同体など）を取り込んでしまっている[15]．フッサールは，こうしたことから，人間の考察をめぐって自然主義の限界が示されたと主張する．

「……自然や自然考察の分析は補完される必要があり，また，いくつかの前提を携えているために，みずからの外に存在と研究の別の分野があることを示唆している．そしてその分野こそ，もはや自然ではない主観性の領野である」(Hua. IV, S. 172).

このようにして，現象学的分析は自然から精神へと焦点を向けかえることで，方法的自然主義を廃棄するのである．こうして精神としての主観性が，「志向性の主観と呼ばれるような『精神的』主観」(Hua. IV, S. 216) が分析の俎上に乗せられることになるが，この精神というのは「別の重要な研究様式を可能にし，要求している」(ebd., S. 191) のである．つまり，環境世界における人格として生きる主観は，周囲の事物や人間と実在的な因果関係のうちにあるのではなく，「実在的なものへの志向的関係」(ebd., S. 215) や「動機づけ関係」(ebd., S. 189) のうちにある．そして，人格としての人間は，他者と「コミュニケーション活動」を行うことで「共同体」や「社会性」を構成している (ebd., S. 194)．また，志向的関係において把握された事物は，「人格的自我の意識のうちに現実に存在しているものとして『意味のうちにある』事物そのもの」(ebd., S. 189) であり，「騒がしさ」「美しさ」「善さ」などの意味や価値をはらんだものでもある．人格と事物や他の人格とのこうした動機づけ関係は「精神的生の法則性」

(ebd., S. 220) であり，フッサールによれば，これを解明するのが精神科学的態度ないしは人格主義的態度の学問（精神科学）の役割りである．

結び

自然の現象学的な分析においては，「基づけるものとしての物理的経験があり，それに根ざし，それを共に含んでいるという仕方で，身体経験が，つまり人間や動物を構成するような身体経験があり，後者には，その構成的な層として心経験が属している」(Hua. IV, S. 174) というような，基づけの階層が追跡された．このように，自然主義的態度においては，事物を最下層として，身体，心が築き上げられるという一方的な基づけ関係が成立している．このとき，「心は，自然科学的に見れば決して自立したものではなく，身体における実在的な出来事の単なる一つの層であるにすぎない」(ebd., S. 175) とされ，志向性としての主観性に目が向けられることはない．それゆえ，フッサールは自然主義を次のように批判することになる．

> 「どんなところでも自然だけしか見ない者は，すなわち自然科学という意味での自然をいわば自然科学の眼で見る者は，精神の領分，精神科学の特有の領界に対してまさに盲目である」(Hua. IV, S. 191).

自然主義が抽象によって自然を純粋に取り出したとき，捨象された側にある精神的なものは，自然に意味付与する機能として，――例えば，事物統握などとして――暗黙のうちに前提にされていた．つまり，自然科学者は，そうした統握において自然を経験し，それに依拠して自然を理論的に規定しているにもかかわらず，みずからが遂行する志向的能作には無自覚のままだった．こうしたことを踏まえ，自然主義を批判することが哲学の急務と公言してはばからなかった[16] フッサールは，「自然主義的世界に対する精神的世界の存在論的優位」(Hua. IV, S. 281) を唱えて，『イデーンII』の分析を終えようとしている．つまり，「自然というものはつねに，

絶対的なものに対する相対的なものでしかなく」,「自然に意味を与えるもの」(ebd., S. 297) としての精神を必要としている．こうして志向的意識による対象の構成という現象学の基本的見解が再確認されることで,『イデーン II』は締めくくられる．

しかしながら，これによって何が批判されているのか，つまりこの自然主義批判は基づけの概念の否認を意味するのかどうか，現象学が単なる観念論的な意識哲学になっているのかどうかということは，慎重に検討されねばならないだろう．というのも，フッサール自身が,「この特殊に精神的な自我は，精神活動の主観は，人格性は，みずからが……自然に依存していることを見いだす」(Hua. IV, S. 276) というように，人格が自然に依拠していることを指摘しているからである．この意味で「どの精神も『自然面』をもっている」(ebd., S. 279) のであるとすれば，人格の分析においても，自然による精神の基づけという発想は廃棄されていないはずである．それゆえ,『イデーン II』の最終的な人間理解を特徴づけているのは，精神の絶対性を主張する観念論的な立脚点ではない．むしろ,「統一的な人間統覚のうちには，二重の統握（人格主義的統握と自然主義的統握）が含まれている」(ebd., S. 247) という言い方に見られるような，双方向性こそが引き合いに出されるべきであろう．こうしたことから考えるに，フッサールが攻撃しているのは自然主義そのものではなく，自然を絶対化し，精神の独自の地位を容認しないその一面性であると言えよう(17).

> 「したがって，完遂された現象学は，実証性における単に見かけのうえで普遍的であるにすぎない存在論とは異なり，真に普遍的な存在論である．それは，まさにそれゆえに従来の存在論の独断的一面性を克服し，またその不可解さをも克服しているのである」(Hua. IX, S. 297).

こうしたフッサールの自負が少しでも正当なものであるとすれば,『イデーン II』は自然と精神の双方から人間や世界を理解する試みであらねば

ならない．そうしたときにのみ，領域的存在論が「普遍的で具体的な存在論」(Hua. I, S. 181) となる可能性が生じ，現象学は「下と内から」(Hua. XXIV, S. 387) の哲学という自己規定に到ることができるだろう[18]．

注

(1) 続編である第2巻は，フッサールの生前に出版されることがなかった．第2巻の草稿は，事象分析の部分がフッサール著作集 (*Husserliana*) の第4巻として，学問論的課題が第5巻として出版された (Vgl. *Husserliana* IV, S. XV～XX)．ここではフッサールの生前になされた構想を『イデーン第2巻』，著作集の第4巻を『イデーンII』と呼ぶことにする．なお，*Husserliana* (Den Haag, Martinus Nijhoff, Kluwer Academic Publishers 1950—)．からの引用は，Hua. という略号を用いたうえで，巻数と頁数を本文中に表記する．

(2) L. ラントグレーベ:「フッサールの現象学の存在の諸領域と領域的存在論」『現象学の道　根源的経験の問題』山崎庸佑・甲斐博見・高橋正和訳，木鐸社，1980年，所収，262頁／L. Randgrebe: *Seinsregionen und regionale Ontologien in Husserls Phänomenologie*, in *Der Weg der Phänomenologie Das Problem einer ursprünglichen Erfahrung,* Gütersloher Verlagshaus Gred Mohn, Gütersloh, 1963. S. 161

(3) 「構成という方法的概念は外見上，観念論的色合いをおびる」(ラントグレーベ: 前掲書，238頁／ebd., S. 147)．リクールの言い方を借りれば，こうした分析方法は「方法論的観念論」と特徴づけられるだろう．Paul Ricoeur: *Husserl An Analysis of His Phenomenology*, trans. by E. G. Ballard and L. E. Embree, Northwestern University Press, Evanston, 1967. p. 37

(4) 『イデーンII』では，第1篇で物質的自然の構成が，第2篇で生命的自然の構成が解明され，第3篇において精神的世界の考察が始まる．

(5) 「自然主義者は，……自然のみを，しかも差し当たりは物理的自然のみを見る．存在するものはすべて，それ自身物理的なものであり，つまり物理的自然の統一的連関に属しているか，あるいは，心理的なものであっても単に物理的なものに依存して変化しうるものであり，せいぜい第二次的な『並行的随伴事実』にすぎないものであるかのいずれかである」(Hua. XXV, S. 9).

(6) Ullrich. Melle: *Nature and Spirit*, in *Issues in Husserl's Ideas II*, edited by Thomas Nenon and Lester Embree, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht/Boston/London, 1996. p. 17

(7) この意味で現象学的心理学は超越論的現象学の予備学であるとされる (Vgl. Hua. IX, S. 278, 295).

(8) メルロ＝ポンティは，とりわけこの二つの傾向について敏感だった．「彼［フッサール］は，志向的分析がわれわれを相対立する二つの方向に導くことを隠そうとしない．志向的分析は一方では自然，つまり根源的に現前するものの領域へ下降するが，他方それは人間や精神の世界へ引かれていくのである」(M. メルロ＝ポンティ：「哲学者とその影」『シーニュ 2』木田元訳，みすず書房，1970 年所収，33頁／M. Merlau-Ponty: *Signes*, Paris, Gallimard, 1960. p. 224).

(9) Vgl. Hua. XIX/1, S. 227–300

(10) Vgl. Hua. XIX/2, S. 673ff.

(11) Vgl. Hua. XVI, § 1／E. Husserl: *Erfahrung und Urteil* hrsg. von L. Randgrebe, 7. Aufl. Hamburg, Felix Meiner Verlag, 1999. S. 18ff.

(12) これは「しかじかの周囲状況のもとで，しかじかのものが現れる」(Hua. XVI, S. 345) とも定式化されている．

(13) Empfindnis は邦訳で「再帰的感覚」とされている．『イデーン II–I』立松弘孝・別所良美訳，みすず書房，2001 年，223 頁参照．

(14) ここでは，根源現前と自然が，付帯現前（非現前）と精神が重ね合わされていることに注目されるべきである．少なくともこの点において，フッサールは，他者を現前しないものと考えるエマニュエル・レヴィナスと歩みを同じくしている．

(15) 「この先の諸研究によって人格的ないし精神的自我に属するものとして証示されるであろうものの多くが，この構成的考察のうちに必然的に引き入れられてしまっているということがありうる」(Hua. IV, S. 143).

(16) 「自然主義的哲学を根本から批判することこそ，今日において重要な任務なのである」(Hua. XXV, S. 8)

(17) フッサールの自然主義批判の有効性は，自然に解消されない志向性の特有性という発想が承認されるかどうかにかかっていると言えるだろう．

(18) したがって，自然による精神の基づけに盲目であるような観念論（内からだけの哲学）も，一面性を免れないことになるだろう．なお，フッサール現象学を「下と内からの哲学」と特徴づけることに関しては，谷徹「媒体性の現象学のアナトミーあるいは生命の現象学のヴィヴィゼクチオン」『媒体性の現象学』青土社，2002 年，所収，177 頁以下を参照．